

# 国際文化フォーラム通信

no. 100

歴代事務局長  
インタビュー

特集

公益財団法人  
国際文化フォーラム  
THE JAPAN FORUM  
日本国際文化交流財団  
일본국제문화교류재단

## 歴代事務局長インタビュー

# 私の決断

★撮影：大木 茂

1987年6月22日に出帆して26年、国際文化フォーラムはどんな羅針盤のもと進んできたのか。さまざまな状況とどう向き合ってきたのか。歴代事務局長に、その航路を振り返りながら、下してきた決断を語っていただきました。



## 市原徳郎

*Ichihara Tokuro*

1987.6-1990.12

### 無から有をつくる

**在任中のおもな事業**：財団設立の準備から発足までの諸活動。北京市青少年日本語コンテストなど中国関連事業、ユーロバリア89ジャパン【ベルギー】参加、国際文化交流情報誌『ワールドプラザ』創刊、機関誌『国際文化フォーラム』発行など

★

私が新しい財団の設立プロジェクトチームに加わったのは1987年2月のことです。もともとこのプロジェクトは外務省の提案で始まりました。ジャパンバッシングが激化する一方、海外の日本語学習者が増えていました。これに対応するために、国は国際文化交流を推進する民間財団が必要となっていたんでしょう。提案というよりもかなり強い要請でしたね。それから、受け手の野間惟道講談社社長（第5代）も、第4代の省一社長とは違う

国際文化交流をやりたいという気持ちがあったのでしよう。省一社長は出版文化の国際交流やアジア・ユネスコ文化センターの設立に尽力しましたから。1986年7月の役員会で、惟道社長が日本語と日本文化を軸にした国際文化交流の財団をつくりたいと提案し承認されたんです。

外務省からは年度内につくってほしいと、催促の電話が矢のようにかかってくるわけですよ。それなのに、なかなか進まない。それで、とうとう1月に広

告局長だった私は社長に呼ばれて、財団設立準備のチーフとなってほしいと言われました。50歳過ぎてから英語をやるのは勘弁してくださいって、すぐさま断りました。だけど、仕事をする相手はみんな日本語ができるし、世界に日本のことを知ってもらう仕事だって言われて、もう断る理由がなくなっちゃった。外務省に私の経歴を出して、私が財団準備室のチーフになることので承を得ました。

それにしてもです。5月までにはつくってほしいというんですね。メンバーは5人ぐらいいましたけどね、みんな財団に関わったことなんてないし、専任でやっていたのは3人ですよ。私は以前、アジア・ユネスコ文化センターの規模を大きくするときにお手伝いをしたことがあり、少しは事情がわかっていました。それでも大変ですよ。私が前職の引き継ぎをして実際に設立準備にとりかかれるようになったのは3月。いくらなんでも5月は無理だと説得して、6月に照準を合わせました。講談社1社ではなくほかの企業もいっしょに、ということで、まずは出捐企業を決めて、3億円の基本財産の割り振りをして、設立趣意書、寄附行為をつくり、事業計画と予算案を決め、役員を委嘱し、賛助会員を募り、財団の名前を決め……。実は、名称は「国際文化協力財団」となる予定でした。これで名刺やハン

コまで作りましたよ。でも、ありきたりすぎるんじゃないかって声が上がって、発足直前に「国際文化フォーラム」になったんです。

それでようやく設立の仮申請が許可されたその日に、惟道社長が亡くなりました。茫然自失とはこのことです。しかし、1週間後には設立パーティが予定されていて、400人に招待状も送付して出欠までとっていた。やるしかない。すぐに、代表変更の書類を出しました。そして財団設立の認可が下りたのが、パーティの前日、6月22日です。スタッフ全員が必死でした。

## 大海への船出

財団ができて、さて肝心の事業です。何をするのか、大きな方向性は決まっていたものの、具体的なことを立案していかなきゃいけない状況でした。ネタさがしのために、ほかの財団が何をしているのか、ずいぶんリサーチもしましたね。

外務省から提案があって、旗揚げ公演として日本研究国際シンポジウム「ジャパンプロブレムは存在するか」と日本語国際シンポジウム「諸外国での日本語教育の現状と問題点」をやりました。日本語国際シンポジウムは国際交流基金と共催しまし



日中共同で作成した日本語実力試験問題10年分をまとめた冊子。

た。日本研究のほうは特に外務省がやりたかったんです。ジャパンバッシングに対抗するために、日本の有識者と海外の日本研究者をパネリストにして、日本理解の一助にしようと思っていたんですね。

その後、中国、韓国、タイ、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ各地で、日本文化紹介の展覧会や講演会をやりました。特に思い出深いのは、1991年にロンドンで開かれたジャパン・フェスティバル「Visions of Japan 展」の企画に協力した時のことです。会場にいらした皇太子にフォーラムの平常の活動とこの企画への取り組みを説明すると、「ご苦労様です。これからもよろしくお願いします」と声をかけられ、大変光栄に思い、恐縮しました。

また、国内の国際化も当時の大きな課題でした。地域での国際交流を促進し、その担い手を育てるために外務省で国際文化交流情報センターをつくるから、機関誌をつくってほしいという話ができました。これこそフォーラムに期待されていたことです。こちら、何か柱となる出版物を出したいと思って



1993年、常務理事として市原氏が行ったヨーロッパ翻訳者会館(ドイツ・シュテレン市)への図書寄贈贈呈式。左はレジナー・ピータース同会館図書部長(当時)。



北京市青少年日本語コンテストでは日本語実力試験も行われた。写真は、会場を確認する参加者。

いたので、これはいいじゃないかということになりました。それが、『ワールドプラザ』の創刊です。内容は、おもに国内で行われる国際交流イベントのお知らせや世界各地の大使館から収集した情報です。機関誌というものの、外務省の買い上げは950部だけで、あとはこちらの負担でしたから、財政的に非常に苦しかった。結局、8年後に休刊が決まりましたが、そのときも、その後も外務省関係者からは何とか続けてくれないかと強く言われました。できるなら、続けたかったですよ。でも、資金には限りがありますからね。

### フォーラムの独立へ

五里霧中のような状態で始めた事業は、ほとんどが外務省と相談しながら二人三脚のようにやったのですが、中国での日本語関連の事業はフォーラムが独自でやったものです。中国に詳しいスタッフがいたんです。放送大学のカリキュラムや教科書をつくったりしました。いちばん心に残っているのは北京市青年連合会といっしょに実施した「北京市青少年日本語コンテスト」です。毎年、2,000人を前にあいさつしましたよ。北京大学の優秀な学生が通訳してくれてね。いつものように「ニーハオ」ってあいさつしたら、ある人が幕間に「市原さん、

ちがいます」と言うんですよ。「大勢を前に言うときは、ニーメンハオです」って。ええっ、もう3年もやっちゃったよって。そんなこともありました。

ほかの事業は単発が多かったのですが、このコンテストは10回続きました。中国の関係者と仲良くなって、横のつながりで人脈も広がりました。フォーラムの名前を知ってもらうために、一発豪華主義も意味があったと思いますが、国際交流は継続しなくちゃいけないと、この事業で実感しました。中国とやったことも良かったと思います。

1991年、ちょうどバブルがはじけたころです。講談社で、増えてきた国際関係事業を見直すことになりました。フォーラムは独立した財団法人ではありませんが、講談社の国際交流推進室から出向したスタッフが事業を行っていたんです。財団活動をさらに進めるために独立させるべきだとの声もあったので、フォーラムを実質的に独立させることになりました。独立するにあたって、基本財産はいくら必要かと当時の野間佐和子社長に聞かれて、私は20億円と答えました。日航財団が20億、東芝国際交流財団が30億円の基本財産でしたから、妥当だと思いましたし、実際、そのころの金利は5%以上ありましたから、20億円あれば運用益で事業は回っていくと考えたんですね。

国際交流は  
継続しなくちゃいけないと  
この事業で実感しました

このような状況下で事務局長のバトンを牛島さんに渡すことになりました。設立準備から数えると5年。何もなかったところから財団をつくり、総花的ではありますが、ある程度の軌道はできたわけですから、後は方針に沿って事業を足したり引いたりしていけばいいだろうと思っていました。次の人たちの時代です。 **FT**



1989年にベルギーで開かれた「ユーロパリア89ジャパン」に出展。蔵書票（所蔵者を示すために書物の裏表紙などに貼る小紙片）に見入る来場者。  
上はTJFがつくった蔵書票。参加者に配った。



# 牛島通彦

Ushijima Michihiko

1991.1-1998.3

## 民間の高校生大使 を育てたい

在任中のおもな事業：全中国外国語学校中学生日本語弁論大会、中国中学校日本語教師研修会、アメリカ・ウィスコンシン州日本語教育支援事業、図書寄贈、国内の高校の中国語・韓国朝鮮語教育の現状調査など



1994年に中国南京で開かれた外国語学校中学生日本語弁論大会。

★  
事務局長になってそれまで温めていたことをどんどん実行していった。大きなこととしては三つ。

まず、国際文化交流に熱い思いをもつプロパーの採用。新聞広告で募集したら優秀な経験者の応募もあったけれど、あえて未経験者を4人採用した。財団ができて4年が経ち、講談社から独立することが決まったところで、フォーラムにとっては新たな門出なわけ。同じ志をもった若い人たちといっしょに学びながら、国際文化交流に全力を注ぎたいと強く思ったんだよね。

二つ目はそれまでの事業の見直し。それまでのように総花的にやったのでは、小さな財団では限界があると考えようになっていたから、事業を絞ろうと思った。海外での日本語教育といったときの地域は、地政学的にいった東アジアと環太平洋が大事。具体的にはおもに中国と韓国とアメリカ、オーストラリアだよね。

年齢層も絞ることにした。21世紀を担う若者たち、つまり中高生にしようとなった。きっと10年

後、20年後の成果も大きいだろうという思いがあったね。

三つ目は理念の見直し。当時は日本語の普及、特に外務省は普及をいったんだけど、われわれは押し付けではなくて、お互いに学び合うことが必要だろうと考えた。そうなれば、国内の高校生にも中国語とか韓国朝鮮語を学んでもらうのがいいんじゃないか。それでまずは国内の中国語教育事業を始めることにした。

この三つのことで、財団の舵を大きく切ったんだよね。

そして私自身の課題としたのは、理想的な職場づくり。特に当時は雇用機会均等法が施行されて女性の社会進出が注目されていたこともあって、女性が働きやすい職場をつくりたいと思ったね。じゃあ働きやすい職場って何だろうって考えると、メンバーが信頼し合っていることが基本にあって、一人ひとりが出勤してくること自体が楽しくて、働き甲斐があると感じられること。具体的には、有

給休暇を100%消化してほしいと思ったし、オフィスレイアウトにもこだわりたかった。女性に対しては子育ての支援をちゃんとやりたいと思った。だからそのとき、子育て中のスタッフに対しては在宅勤務も認めたよ。とにかく、フォーラムはソフトウェアが命だから、勉強したり考えたりする時間や環境がどうしても必要だと思ったわけ。

私はフォーラムに入るまでは講談社でずっと営業をやってきて、国際交流なんて考えたこともなかった。最初の4年は国際交流基金や日本語教育、中国語教育をはじめいろんな分野の第一線で活躍している人を訪ねては教えを請い、アドバイスをもらった。そして事務局長になって、自分にできることは率先垂範しかないと考えていた。思い切りやらせてくれる出捐企業の方がたの思いに報いるためにも、フォーラムのやるべきことについていろいろなアドバイスをくれた人たちに恩を返すためにも、私ができることは何かと考えると、まずは365日、全身全霊、国際文化交流に打ち込むことだと。

何か特技があるわけじゃないから、せめて、という思いだった。

こういう覚悟をしたのは、財団設立10日前に惟道社長がお亡くなりになったことが大きい。志半ばにして亡くなった無念さはいかばかりだっただろうと。だから惟道社長の無念さ、志を無にしないためには、私一人ぐらい、フォーラムに殉じて、骨を埋める覚悟をする必要があるんじゃないかって思ったんだよね。

## 気持ちが通じたことで得た自信

いちばん忘れられない事業をあえてひとつ挙げるとするならば、中国のエリート校である外国語学校の中高校生を対象にした日本語弁論大会。エリート校の外国語学校6校（上海、深圳、長春、鄭州、南京、武漢）を対象にしたもので、素晴らしいスピーチばかりだったんだけど、2回目から、これは自分が思い描いていたものと違うと思うようになった。代表で出る生徒はもちろん、学校の名誉をかけた先生の競争はすさまじかった。あまりにも周到な準備をしてくるので、お題をあらかじめ出さなくて、その場で与えるような工夫もしてみた。すると、みんな五つぐらいタイトルを予測して、それぞれでスピーチ原稿をつくって、全部覚えてくるわけ。でも予測が外れたらぼろぼろになってしまう。入賞しなかったときの生徒と先生の落胆振りはあまりにも激しかった。学習奨励のつもりがものすごい負担を先生にも生徒にも与えているんだと思ったね。自分たちは何のためにこんなことをやっているのかと回を重ねるごとにその思いは強くなった。

この弁論大会を開催するのに、長春外国語学校の劉元松校長にすごくお世話になって、第1回の会場を引き受けてもらった。次年度以降も開催したいとおっしゃっていたのを、各外国語学校を巡回して、5回目にまた劉校長に戻ることで納得していただいていた。だけど、4回を終えたところで、弁論大会に代えて教師研修を開きたいと劉校長に話したら、こちらの気持ちをよくわかってくれた。教師研修にしたのは、「母鳥を育てていけばひよこ

は育っていくんじゃないか」と思ったからだよ。

この一件からいろんなことを学んだ。まずは劉校長の教育者としての子どもたちへの姿勢、人間としてのスケールの大きさ。心から尊敬できる中国の人に出会ったことは自分の人生にもプラスになったし、自分の思いをわかってもらったことで、国際文化交流をやっていること自信にもなった。

次に中国の底力を見たこと。弁論大会に参加する生徒や先生の気力を目にして、中国って大きなあと、私が予測していた10倍も100倍もすごい力を持っていると感じたね。

そして己の浅はかさを痛感。弁論大会はどこにでもあるし、優秀な学習者を励ましたいと、単純にそう思っていたけれど、深く考えないとただ負担を強いてしまうことになる……。

この事業はその後フォーラムでやっていくのに大きな意味もあったと思う。

心から尊敬できる中国の人に出会ったことは自分の人生にもプラスになった



『Teenage Tokyo』。ストーリー漫画で日本の高校生の日常生活を紹介した。

## 大きな決断

いろいろと事業を絞る過程でいちばん決断が必要だったのは、『ワールドプラザ』の休刊。創刊時は類誌もなかったし、隔月刊とはいえ、提供する情報には価値があったと思う。そのうち国内の国際化の状況も変化し、さらに自治体国際化協会（CLAIR）の機関誌が出てきた。そうなると太刀打ちできない。資金の問題も大きかった。でも、外務省は継続を希望するし、『ワールドプラザ』に関わるフリーのライターもいるし、大きな柱の出版物をやめることへの抵抗は少なからずあった。

これと並行して、世の中はデジタル化へと入っていきこうとしていた。フォーラムはその先陣を切ってデジタル化に踏み切ることにした。ワープロが主流で、パソコンは数台あるだけという状況から、一人1台のパソコン、ネットワーク化を一気に進めることにしたんだよね。でも、『ワールドプラザ』をやり



1996年に中国長春で開かれた中高校の日本語教師研修会。

ながら、デジタル化を進めることは財政的に無理。インターネットが『ワールドプラザ』の役割を果たすだろうという予測もあった。そして、事務局長になってからずっと考え、6年目の1996年に幕を下ろした。

## もっとやりたかったこと

やりたくてできなかったのは、戦略的な図書寄贈。多くの図書を寄贈したけれど（延べ180カ国、約81,000冊）、寄贈した図書の多くはこれぞ日本紹介の本。それが悪かったわけではないけれど、高校生の民間大使を世界で育てるつもりで、そのために必要な図書を考えて、相手の実情に合わせて本を選択して贈りたかったし、今でもできるならばやりたいね。そのためには強い思いと覚悟が必要。例えば、岩波書店は戦前から中国の5大学に

新刊全点を寄贈し続けているんだけど、それは創業者の日中の親善を願う熱い気持ちが歴代引き継がれてきているんだよね。今だったら、電子書籍・雑誌の可能性は大きいと思う。

それから極東ロシアの日本語教育もやりたかったという思いがあるね。1992年に外務省から強く要請されて、日本語助手をサハリンに派遣したことがある。その当時、極東ロシアに送ることは本当に毎日がびくびく、祈りの連続。どうぞ無事に帰ってくださいって。このときは、2年目からはかの機関に託した。当時はこの事業をやる力も経験もなかった。今ならできるのではないかと思う。

自分にとって、図書寄贈も日本語教育も手段、最終的には人物交流にいかなくちゃいけないと思う。その思いは今も当時も同じ。

事務局長になって7年。高崎さんにバトンタッチ



アメリカ・ウィンスコンシン州アップルトンのチルドレンミュージアムに小学生の写真パネル「けんたろうくんの一日」やランドセル、筆箱などを寄贈した。左は高嶋伸和常務理事、右は伊藤幸男米国代表連絡員（ともに当時）。

することになった。私としてはまだやりたいこともあったけれど、高崎さんはあの時代に中国語を大学で専攻していて、フォーラムにとって最高の人選だったと思う。 FT



# 高崎 孝

Takasaki Takashi

1998.4-2003.3

## 「継続」への ささやかな力添え

**在任中のおもな事業：**写真教材「であい：7人の高校生の素顔」作成、高校生のフォトメッセージコンテスト実施、中国中高校日本語教師研修会実施、中国中学・高校生用日本語教科書編纂事業への支援活動、日本の高校生への中国語・韓国語教育支援活動

私が事務局長になってすぐに頭を抱えたのは財政の問題です。もともと基本財産を20億円に設定したのは、金利が5～8%などという1980年代の想定ですからね。だけど、私が入った98年は失われた10年といわれ始めたところで、不景気が慢性化して、金利もゼロに近かった。20億円あっても金利だけではもたない。したがって、寄付を出捐企業に求めるのももちろんのこと、そのほかの支援者もさがさなければならぬ。例えば、三菱国際財団（現、三菱UFJ国際財団）や東京倶楽部。もちろん相手側の目的に合致しなくてははいけませんから、中国の子どもたちに日本語を教える友好的な活動をやっていますなどというプランを提出して、審査をうけて助成金をもらうんですね。

メインの出捐企業から寄付をもらうのも苦しかった。社会全体が不況ですし、さらに出版業界はもっとダメージ大きかったですから。予算編成



の季節がくるとイヤな感じてした。常務理事の高嶋さんと2人で折衝するんですが、お金を出すほうの立場もわかりますからね。そのたびに思い出したことは「継続は力なり」。これは、私が事務局長の任をうけたときに野間佐和子会長（出捐企業の社長としてでしたけれど）にいわれたことばなんです。「非常に規模は小さい財団ですけども、やっている事業はしっかりしています。続けることに意味があるんです。継続こそ力なりです」。今でも耳に残っています。

## 大変だったがやり甲斐があった

最初に行った出張は1999年7～8月に中国東北3省（吉林省、黒龍江省、遼寧省）の3カ所で行われた中国中高校日本語教師研修会です。スタッフが苦心して編集し、日本で印刷製本したオリジナル教材をANAが輸送してくれたんですが、遼寧省大連の税関でとめられるという事態になりました。中国は出版物に対する統制が非常に厳しい。勝手に印刷物を作って人民に配っちゃいけないわけですよ。フォーラムに来る前に出版社で中国の著作権の仕事にも携わっていたから、ある程度わかっていたんですが、まさか研修会のわずか150部程度のテキストにまで適用するとは思わなかったですね。結局テキストは、大連でザラ紙に印刷しなおしました。

この研修会に行ってみてよくわかったのは、中国の日本語教師がおかれている環境が悪かったということです。先生方が教える日本語や教授法のレベルが私の想像よりもずっと低かったんですね。



盃を交わすことで、距離はぐっと縮まる。

本当の交流で使う言語は、  
その土地の人たちの  
ことばじゃないでしょうか

つまり、先生方は研修をうける機会がない、支援態勢も教材も貧弱だった。そんななかで頑張っている先生が大勢いるので、大変感心したおぼえがあります。そういう状況ですから、フォーラムが提供する研修はとても大事なものだし、先生たちの感謝の気持ちも一入<sup>ひとしお</sup>だったようです。

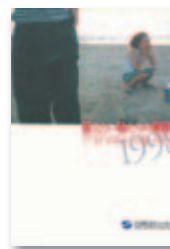
翌年から内モンゴル自治区でも開催することになり、12月に準備のために出かけました。氷点下30度の赤峰市で校庭に水をまいて凍らせたスケートリンクで校長先生や生徒たちとスケートをしました。また教育関係の地方の要人と会食し、お酒を酌み交わしたりもしました。善いか悪いかは別にして、中国、特に地方の場合、いっしょに仕事をしようと思ったら、そういうことをやってお互いにうちとけて、腹を割って話せる仲にならないといけませんね。まして対外国事業となるとあの国では必ずそれなりの役職者に認知されている必要があるわけですから。こちら事務局長くらいは出ておかないといっさい前に進まないんです。

## お互いの言語の存在意義

そうやって研修は広がっていきましたが、その一方で、1980年代の日本語ブームはとうに過ぎ去



韓国語教師研修会がきっかけとなって教師ネットワーク JAKEHS が誕生した。



1997～2006年に実施した「高校生のフォトメッセージコンテスト」の入賞作品などを写真集にまとめた。

り、中国でも日本語を教える学校は減少していってました。世界の動きを見ると仕方ないことでしょうね。だからといって、英語だけが外国語というのはどうなのでしょう。日本でも然<sup>しか</sup>りです。複数の民族が一堂に会して何かをやらなきゃいけないのが当然の時代ですから、共通言語がどうしても必要です。それが英語なのはいいと思います。しかし本当の交流で使う言語は、その土地の人たちのことばじゃないでしょうか。

フォーラムに来た後、中国で日本語教育をやっているだけでなく、日本国内の中国語教育事業もやっていると知って、なるほどと思いましたね。来る前はまさか中国の日本語教育とか日本の中国語教育などをやっているところだとは思っていませんでした。だって、「フォーラム」という名前からはアジアが連想できませんでしたから。

その後間もなく韓国語教育事業も始まりました。遅すぎるぐらいだと思いましたよ。日本語と中国語の関係はしっかりできていたのに、いちばん近い国のことば、韓国語と日本語という関係はちょっと温度が低かったんでしょうね。そのときの担当者と大いにやろうと話し合ったのを覚えています。それで猛烈にエンジンがかかりました。隣国とい



うことという、ロシア語もそうなんです。何らかの事業ができればいいなと思ってはいましたが、マンパワーと資金の問題からできなかったのは残念でした。

## スタッフに全幅の信頼がおけた

プロジェクトにはあまり口出しをしないことにしていました。だって、今まで積み上げてきたプロパー

の皆さんのやり方があるでしょう。私は突然ぼくと入ってきたわけですから……。でも、担当者の皆さんと行動をともにしてじきに事業への理解も深まったし、スタッフへの信頼感も強まってきました。スタッフは非常に積極的だけれども、むちゃくちゃをするようなことはなかったですからね。スタッフから学んで、方針や趣旨をよく理解した上でアドバイスはしましたよ。でも細かい干渉をしないほうが

伸び伸びできて、結果的にそれがよかったと思いますね。

たちまち5年が経ち、任期が終わってフォーラムのプロパーである中野さんにバトンタッチしました。このときは中野さんの力量もよくわかっていましたから、思い切りやってくださいという気持ちでした。 **FT**



# 中野佳代子

Nakano Kayoko

2003.4-2011.3

人をつなぐ  
文化をつなぐ  
社会をつくる

在任中のおもな事業：中国の日本語教材『好朋友』の制作、「外国語学習のめやす」作成プロジェクト、世界の中高校生交流サイト「つながーる」の開発など



アメリカ・ウィスコンシン州の小学校での授業を見学。



フォーラム発足3年後の1990年、国際文化交流事業に携わっていた経験があったことから、財団運営についてアドバイスをしてほしいと頼まれ、非常勤としてフォーラムで仕事をするようになりました。当時フォーラムは講談社の関係者で運営

されていましたが、その2年後、財団の第二の創業ということで、人事・財政・事業全体を見直し、プロパー職員を採用して新たなスタートを切ることになります。そのころから私も常勤で働くようになったのです。

事業の大転換を図った1993年3月の理事会・評議員会は私にとって忘れられないものです。財団設立の趣旨は「ことばと文化」を核とした国際文化交流を行うことですが、日本語・日本文化を海外に普及することが事業の主軸でした。私は、文

## 文化理解や交流などの要素が入って初めて言語教育は文化交流になると思います

ひとりの資質や能力、やる気が財団全体の活動に大きな影響を与えます。個々の良さを引き出し、事業の理念を共有し実現していくにはどうしたらいいのかよく考えました。任期の後半に入ってから、スタッフから上がってきたアイデアを極力採用するようにしました。もちろん、それだけ質の高いアイデアや企画が生まれるようになってきていたということもありますね。スタッフとのインターアクションで事業が決まってきました。

### プログラムは絶えず進化する

自分の思いが形になった事業といえば、2001年の写真教材「てあい」、2009年の日本語教材『好朋友 ともだち』の制作、2012年の「外国語学習のめやす」の開発ですね。後の二つは事務局長のときでもありましたが、担当のひとりという思いでどっぷり向き合いました。一つ制作するごとに自分自身のコンセプトがバージョンアップしていったのです。さまざまな事業で培ったものを「てあい」、『好朋友』に取り込み、それが「めやす」に結実したともいえます。「てあい」では「言語学習」と「文

化交流は一方通行ではなく双方向であることが望ましいと思っていました。海外で日本語教育を促進するのであれば、相互主義に立って相手の言語、とりわけアジアの言語を日本で促進していく。言語教育も文化交流の一環として位置づけて、文化紹介事業と組み合わせながら、若い世代を対象とする文化理解のための言語教育という事業領域を開拓することを当時の事務局長に提案しました。事務局長とともに理事・評議員の皆さまを訪問し、議案の説明にうかがったのを覚えています。最終的に理事会・評議員会で会長をはじめ役員の方がたの承認を得たわけですが、それ以来、事業に対して大きな責任感と使命感をもつようになりました。これは後に事業部長を経て、事務局長となった原点となっています。

「文化交流は人に始まり人に終わる」というフルブライト米国上院議員の名言があります。文化は人間が創造するものですから、文化交流は人びとの生活のあり方や考え、美意識、価値観の交流ですよね。国際文化交流事業によって人と人がつながる、つなげることが大事なわけです。そして言語は文化の中核にあるのですから、日本語なり外国語なりを学び、使うことでその言語話者と相互理解を深める、つながることが外国語教育の最終目標だといえると思います。文法や語彙をひたすら

覚えることが中心の言語教育はフォーラムが追求するものではない。もっと文化も取り込んだ言語教育。文化理解や交流などの要素が入って初めて言語教育は文化交流になると思いますし、そうすべきだと思ってきました。

しっかりしたビジョンと理念をふまえて、ほかではやっていないオリジナルな事業を開拓するスピリットを常にもっていたい。小さな組織でもキラッと光る仕事がしたい。小回りのきく民間財団には、前例のない先進的なアイデアを行動に移せるという強みがありますので、その良さを生かすことをめざしました。

### 事務局長になって

2003年度に事務局長になっても、事業についての思いや考え方は変わりませんでした。事業以外の総務・財務に注ぐエネルギーの比重が当然大きくなっていきました。フォーラムの強みを生かして活動できるのはスタッフ、そして事業に協力して下さる人がいるからですが、何よりも財団運営や事業に資金を提供して下さる企業や団体の支えがあってこそ話です。その方がたに対する責任は重たいものでした。

また、人を育てることを強く意識するようになりました。フォーラムは小人数の組織ですから、一人



2005年、日本語教育学習研究センターの開所式で、大連市教育局の王副局長(当時)と。

化理解」に「人間理解」を加え、この三つを学習目標とし、教材に登場する7人の日本の高校生を理解する過程で、日本語や個人の背景にある文化を学べるようにしました。こうした蓄積にもとづきながら、いま世界の教育界を席卷しているOECDのキーコンピテンシーをいち早く言語教育に取り入れ人間関係づくりをめざしたのが『好朋友』です。そしてこれは、「めやす」の枠組みにつながりました。「めやす」では、「他者の発見、自己の発見、つながりの実現」を外国語教育の理念に掲げていますが、外国語学習を教室のなかに閉じ込めずに、学んだ外国語を使っていろいろな人とつながる、自分が生きている社会とつながることをめざしました。「めやす」は、文化交流としての言語教育を形にしたといえると思います。

ただ学校現場で交流まで実施するのは大変なことですから、フォーラムが日中高校生のサマーキャンプのような交流の場をしっかりとつくりあげ、文化交流としての言語教育がもっと見えてくるのではないのでしょうか。

## 事務局長だからできたこと

いま挙げた三つの事業は大型の資金調達が必要でしたが、活動に必要な助成金を出してくれる財団や企業に出会うことができました。フォーラム

を信頼し、ともに夢の実現に向けて協力してくれた多くの人びとのことは一生忘れないです。とりわけ『好朋友』は日中共同事業だっただけに奇跡的でドラマのようでした。2005年のことです。中国で日本語を開講する学校が激減するのに何とか歯止めをかけようと、遼寧省の教育行政関係者と日本語教育関係者を招聘しました。一行のひとり、大連市教育局の王允慶副局長に、日中間の相互言語教育を促進し、それによって日中の若い世代をつなげたいのだと話すと、わが意を得たりだと言ってくれました。「私たちがもっている権限でできることをまずやってみよう。海を隔てた子どもたちがそれで少しでも近づくなら自分の仕事、そして人生に意味がでてくる」と。中国の教育行政関係者とながった瞬間でした。そしてここから『好朋友』の制作プロジェクトが始まったのです。

## 言語教育が共同体づくりに果たす役割

文化交流の観点から始めた相互言語教育でしたが、いまやグローバル社会が実際にそれを必要としていると思うんです。まさに多言語多文化社会、

そして複言語複文化の人間が求められる時代が到来していると実感しています。時代、社会の状況に合わせて意図をもった文化交流事業は何をするべきなのかをいつも考える必要があります。私はフォーラムで若い世代の外国語教育を支援する事業に従事するなかで、ひとつの青写真を描くようになりました。日中韓という東アジア共同体の構築には、土台として互いの言語と文化の理解・共有が必要不可欠です。そのために3カ国が互いの教育制度のなかにそれを位置づけ支え合うという構想でした。国家レベルの話と聞こえるかもしれませんが、一民間財団として井戸を掘り、プロトタイプを示せないか、という思いでした。土台や考え方はできたのではないかと考えていますが、今後のフォーラムに期待するところ大です。

これからもフォーラムが中心となって同じ志をもつ団体や人たちの力を結集して、行政にも働きかけていってほしいです。国内外、両方で事業を行っているフォーラムだからこそできることがあるはずです。私をずっと支えてきてくれた水口さんが新たな道を切り拓きながら、大事なミッションを果たしていってくれることを期待します。 FT



写真教材「であい」。A3判の写真シート192枚と冊子、CDからなるこの教材は総重量10キロを超える。



# 水口景子

Mizuguchi Keiko

2011.4-

## ともにつくりだす

現在進行しているおもな事業：互いのことを学ぶ中高校生の交流プログラム、「外国語学習のめやす」「好朋友」「くりっくにっぼん」活用のための教師向けワークショップの実施

関係者が集まりました。これが大きなスタートになりました。

2013年度から、多くの言語教育の現場で実際に使ってもらうための第一歩として、「学習のめやす」の考え方に共感する8言語の教師を対象にマスター研修を開いています。「めやすマスター」と呼ばれる先生方が今後、各地で「学習のめやす」講座やワークショップを開催していってくれると思います。

開発をインフラ整備だとしたら、私がやっているのはソフトウェアのほうですね。開発には大変なエネルギーが必要ですが、ソフトウェアにインフラ整備以上のエネルギーを注ぎたいし、必要だと思っています。

### ミッションを果たすために

私たちのミッションは、多様な文化背景、言語をもっている人たちがいっしょに何かをつくったり、問題解決をしなくてはいけないこれからの時代に、いっしょにやっていける力を若い人たちに身につけてもらうことです。その力とは何かというと、コミュニケーション力、協働力、情報活用力、コラボレーション力などです。こうした力を獲得するのに、外国語を学ぶことはとても効果的だと思っています。このときに、ただ教室のなかだけで学ぶのではな

★  
事務局長になってまずやっていたのが、『外国語学習のめやす』『好朋友』を根づかせること。この二つは理念を形にしたものですが、形にして終わりではなくて、現場で使われるようになって初めて目標を達成できるわけなので、それをやっていたと思ったんですね。

それと同時に、「学習のめやす」で対象とする言語を中国語と韓国語からオール外国語にしようと決めました。中国語教育事業の担当者だったときは、他の機関がやっていない中国語教育と韓国語教育に関する事業をやっているだけで意味があったのですが、事務局長になって全体を見たとき、二つの言語だけに閉じ込めてはいけなかったと思います。だから、中国語と韓国語教育からの提言という副題をつけて出版しました。「学習のめやす」の提案を広めるためには、すべての外国語教育に携わる人たちが力を合わせたほうがいいし、「学習のめやす」はそのための共通基盤になりうると思ったのです。中国語の先生と韓国語の先生を対

象にした研修が始まった2009年にはすでにその意識は芽生えていたと思いますが、オール外国語を対象にした第一歩は、2011年夏に開催したシンポジウムでした。シンポジウムには、スペイン語、ドイツ語、フランス語、ロシア語など各言語教育の



# 教室のなかだけで学ぶのではなく、 学んだことばを使って 人とつながることが必要

く、学んだことばを使って人とつながることが必要で、その場をつくるのが私たちの大きな仕事だと思っています。このとき同じ思いをもっている先生方といっしょに場をつくり、効果的な仕掛けをつくっていくことが重要になってきます。人と会って、あいさつをして、楽しいときをいっしょに過ごすだけではなく、自分の意見を相手にぶつけ、お互いに調整して、何か新しいものをつくる活動を入れていくなど、さまざまな工夫を考えていかなくてはなりません。日中の高校生サマーキャンプ、日韓の中高校生交流事業、協働を生み出すプログラムの開発事業では、言語教育や交流学習、情報教育の専門家といっしょにさまざまなコラボレーション活動を行っています。

こうした場づくりには、海外で日本語を教えている先生方の力も欠かせません。人を通して日本を発信している「くりっくにつぼん」ウェブサイトを活用して、生徒の考える力や発信力を養う授業実践をされているアメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国、中国をはじめ各国の先生方と多く出会いたいと思っています。



「SEOULでダンス・ダンス・ダンス」の報告会でダンスを披露。

## これからに向けて

私が事務局長になったのと同時期に、TJFは公益財団法人に移行しました。「公益」の重みは予想していた以上です。例えば、何か間違ったことをしたら法人は解散しなければならず、財産は没収されるわけです。公益とは何か、公益たるにはどうあらねばならないかを改めて問うことになりました。広く支持をもらえるよう、もっと広報もしていけないですし、何よりも事業の質を高めていくことが必要だと思っています。

TJFは小さな組織です。同じ人がひとつのプログラムにずっと関わる人が多いので、知識やノウハウを蓄積して、プログラムをどんどん改良していくことはいいところだと思っています。その一方で、やり方や発想が同じになってしまいがちです。担当ではないプログラムに関わることで、新しい視点を持ち、一人ひとりがもっている力を最大限に発揮してもらいたいと思っています。そうすることが、いい事業につながっていきますから。

私たちは研究者でもなければ、教師でもありません。独りよがりにならないよう、自ら学びながら、同じ志をもった方たちとともに、子どもたちがことばと文化を学び、コラボレーションする場をつくる事業を着実に進めミッションを達成したいと思っています。 FT

## 編集後記

『国際文化フォーラム通信』100号を記念して、今号はこれまでとはちがうデザイン、内容でお届けします。ふだんは黒子であるスタッフの意外な一面や、歴代事務局長のインタビューを通じて、時代や社会状況に即して変わってきた事業、変わらない思いをお伝えしたいと思ったのです。

これまで『国際文化フォーラム通信』では、事業の様子だけでなく、私たちが考えていることやめざしているものを、その時々々の教育現場での関心にからめながら取り上げてきました。ICTを特集した93号には、「ICTに関連する公開授業や研究会でぜひ配布したい」と要望が寄せられたり、21世紀に必要な力を育てるためのアプローチについて考える特集を組んだ96号では、多くの方から「参考になった」「刺激になった」と感想をいただきました。一つひとつのコメントが、とても励みになりました。

昨年6月に開設したfacebookの公式ページでは、スタッフが日々何をしているか、どんな人たちと出会っているかなどをリアルタイムでお伝えしています。来年1月にはメールマガジンを創刊し、TJFが主催、協力する催しの情報はもちろん、事業に関連するニュース、ウェブサイトの更新も発信していきます。もちろん印刷物も引き続き活用することになりません。これからもさまざまなメディアを活用して、皆さまとつながっていきます。

私たちのミッションに共感してくださる皆さまとつながるのは、今号で紹介したスタッフ10名十…です。得意なこと好きなこともちがう、考え方もさまざま、でも大きな目標を共有しています。少ない人数であっても、そんな集団だからこそ、時代の変化を踏まえ、新しいことにチャレンジできると確信しています。ミッションを達成するために、天空を流転する星のごとく事業を進めていきたいと思えます。

これからもご指導、ご協力をよろしく願っています。

水口景子

公益財団法人  
国際文化フォーラム  
〒112-0013  
東京都文京区音羽1-17-14  
音羽YKビル3階  
Phone: 03-5981-5226  
Fax : 03-5981-5227  
E-mail : forum@tjf.or.jp  
www.tjf.or.jp  
2013年12月発行

特 集

歴代事務局長  
インタビュー





特  
集

# 10×10 +10...

発行人・内藤裕之／編集人・水口景子  
デザイン・gfd (山本義明)  
印刷製本・凸版印刷 (株)  
校閲校正・天山舎  
写真・大木茂 (ネパール・ポカラで撮影)